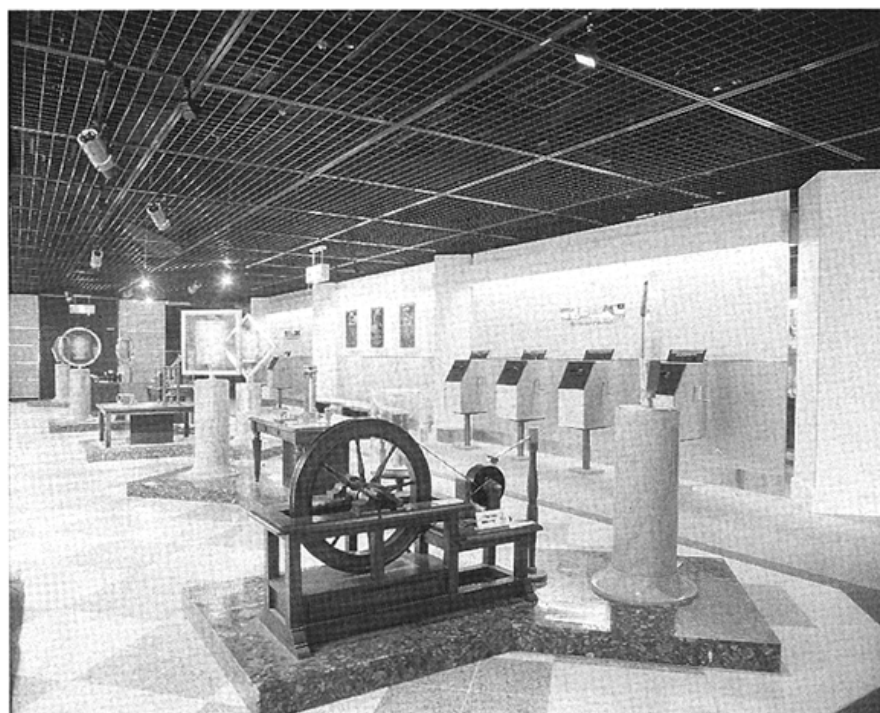




オットー・フォン・ゲーリケ（ドイツ人）が一六七二年に発明した静電起電機を応用した「まさつ起電機」

現代の社会生活においては、電気はなくてはならないものの一つであるが、我々はその日常生活において、電気を使っているという実感がないのが実情ではないだろうか。

でんきの科学館では、2階の展示室B「くらしと電気」を全面改装し、3月21日からリニューアルオープン。

日頃何気なく使っている電気製品の中を覗いてみたり、電気の不思議を解き明かす楽しい実験や工作教室のある〈想像・創作ゾーン〉と、なぜ蛍光灯がつくのか？なぜ冷蔵庫は冷えるのか？なぜ掃除機はゴミを吸い込むのか？電子レンジはなぜものを温めるのか？などを体験しながらその謎を解き明かす〈体験・体感ゾーン〉のほかに、70インチの大画面に登場するスーパーおうむ君が5人同時にナビゲートし、クイズとゲームに挑戦する“スーパーおうむ君のマジカルチャンネル”など子供から大人まで楽しんでいただけそうです。

(でんきの科学館)

目 次

●平成9年度東海3県博物館協会交流研修会報告.....	2
●平成9年度部門別研修会報告	2～4

平成9年度 東海3県博物館交流研修会報告

第22回東海三県博物館交流研修会が10月2日(木)～3日(金)の両日、岐阜市の岐阜勤労総合福祉センター「ぎふ長良川ハイツ」で開催され、参加50館(愛知県20館、岐阜県17館、三重県13館)80名の出席がありました。

以下、研修会の概要を報告いたします。

第1日目

1. 開会挨拶

佐藤悦郎氏(岐阜県歴史博物館館長)

来賓挨拶

武山栞司氏(岐阜県教育委員会事務局
指導部 文化課長)

2. 講演

テーマ 「地球」 各講師とも同じテーマ

- ① 講師 中村幸昭氏(鳥羽水族館館長)
- ② 講師 樋口敬二氏(名古屋市科学館館長)
- ③ 講師 名和秀雄氏(名和昆虫館館長)

3. その他

来年度23回東海三県博物館協会交流研修会の開催される三重県代表から挨拶がありました。

第2日目

見学会

- ① 岐阜県博物館
- ② かがみがはら航空宇宙博物館

平成9年度部門別研修会報告

歴史民俗部門

平成10年2月19日、一宮市博物館を会場として「活きている博物館～歴史系博物館のこれから～」というテーマで開催した。

従来、講師を招いて講演会形式で行う歴史民俗部門研修が多かったので、今回は同じ目線で話を聞くことができる学芸員、特に刺激的な活動をしている館の学芸員を招き、その奮闘記についてお話しいただいた。

当初、動きのない(HOW TOものではない)研修内容のため参加者が少ないのではと懸念されたが、蓋を開けると60名となり部屋が狭く、参加者の皆さんに大変ご迷惑をおかけした。

今回の研修の特徴は、歴史系博物館、また県内の館にこだわらず事例発表をしていただいたこ

と、事前に学芸員個人を対象とした「心のアンケート」を実施したことである。事例発表では、まず最初に、県内博物館の中で博物館としても老舗であり、普及活動の先駆者とも言える日本モンキーセンターの水野礼子氏にウン十年余りの活動を、友の会・サマースクール・博物館セミナーを中心に話していただいた。岐阜県の内藤記念くすり博物館の野尻佳与子氏には、さまざまなメディアを活用した組織的なリファレンスについて話していただいた。鳳来寺山自然科学博物館の加藤貞亨氏がお話をされる前、レジメに添付された「たより」を目にした参加者から溜息のような歓声のような呻きが聞こえた。興味のある方は、是非ご覧いただきたい。地域に密着し、来館者の声を生で聞き、館の活動を来館者に生の情報として伝える大切さが伝わってくる。浜松市博物館の佐藤拓伸氏には、小学校を展示用キットを持参して巡回する移動博物館の活動をご紹介いただいた。県内の博物館ではこのような活動をしている館はなく、普及の利点や弊害についてのお話は、将来学校側からの要望があった際の対応に役立てられるものであった。特に、「本当は、博物館に来て見ることが大切なのでは」という結論が印象的だった。鳳来寺山自然科学博物館が手作りの冊子で有名だとすれば、三重県の海の博物館は展示物が手作りという驚くべき博物館である。野村史隆氏には、25年にわたる学芸員生活の苦労話を若者へのメッセージとともに語っていただいた。

アンケートには94名の方々がご回答くださり、(2月19日現在)、名古屋市博物館の犬塚康博氏に心の傾向を分析し述べていただいた。



会場風景

今回はテーマが「模索する」ことを示唆するものであったので、例年はない懇親会を行った。研修会とともに懇親会にもまた、現在博物館をつくっている最中という愛知県教育委員会の原田幹氏と美濃加茂市教育委員会の可児光生氏をはじめ、展示文化研究所の高橋英次氏、(株)丹青のインターネットミュージアム事務局丸山昭彦氏をご参

加くださり、28名の参加者は夜も博物館談義に時を過ごした。

研修の内容およびアンケートの集計については、後日まとめて報告する予定である。

(一宮市博物館 久保禎子)

美術部門

少しずつ春をたぐりよせるこの時季特有の雨が朝から降り続く3月5日(木)、愛知県博物館協会美術部門研修会が開催されました。

今回のテーマは環境保全および美濃焼。室内講義にかえて、土岐、多治見の陶芸家宅や窯跡などを巡る遠足(真面目な)となりました。約30名が参加し、有益な1日を過ごせたと思います。以下へその概要と感想を報告します。

1. 名古屋市環境学習センター エコパルなごや

環境学習のためのワークショップコーナー、ライブラリー、データベース、バーチャルシアターなどがワンフロアに配され、こどもから大人まで楽しみながら学ぶことができる。生態系、オゾン層破壊、地球温暖化など我々を取りまく「環境」がテーマである。環境破壊は個人のマナーや躾の良し悪しにも一因がある。ゴミ問題と対峙する現代人の自覚を促す場となつてほしい。



環境学習の拠点施設「エコパル名古屋」

2. 林 虎男氏 乙塚窯

黄瀬戸の輪花鉢、銅紐茶碗、志野や瀬戸黒の半筒茶碗、黒織部の香茶碗など、伝統的な美濃焼にじかに触らせていただいた。これらの器は、焼成段階で1割6分〜7分ほど縮むという。輪花鉢の口縁のように流麗な曲線をなしている部分は、特に亀裂が入りやすいそうである。

美濃焼の様々な茶碗にお茶が点てられ運ばれた。私のところへやってきたのは、「あぶらげ手」といわれるマットな肌合い黄瀬戸茶碗であった。黄瀬戸、志野、織部、いずれの茶碗も抹茶が入る

と美しさがきわだった。もちろん計算されて作られたものなのだろう。

3. 土岐市美濃陶磁歴史館

特別展「城下町のやきもの」を同館学芸員の林さんの案内で見学。

茶の湯が隆盛を極めた桃山時代、大量の美濃焼が京都へ搬入されたことは、発掘調査からも検証済みである。美濃と京都は、生産地と消費地という関係にあった。清須城、名古屋城の城下町から発掘された15〜17世紀の陶器で構成された本展においても、陶器の生産地として繁栄してきた美濃の歴史を再確認できた。

4. 元屋敷窯跡(国指定史跡)

元屋敷窯は、慶長年間(1596—1615)に当地の陶工集団の頭目であった加藤景延によって、唐津からもたらされた連房式登窯である。14房の焼成室からなる、全長24メートルを越す窯が丘陵斜面に築かれた。唐津に対抗する量産のために導入されたこの窯から、当時前衛的な陶器とみなされた織部が発祥し、のちに一世を風靡することになる。

今も階段状の焼成室跡が確認でき、「窯」という言葉にもう少しこぢんまりしたイメージを抱いていた私は、予想外のスケールに驚いた。

5. 加藤卓男氏(人間国宝) 幸兵衛窯

加藤卓男氏といえば、ペルシャ陶器ラスター彩の研究と製法復元の偉業を抜きにして語ることはできまい。残念ながら直接お話を伺うことはできなかったが、展示室で数々の優品を拝見できた。

繊細華麗な図柄の黄金とみまごう色彩の顔料は、金ではないのだそうだ。この謎が幻の名陶と呼ばれる理由のひとつであろう。急ぎ足でひととおり見学を済ませると、高級料亭でご馳走をおなかいっぱい食べたような満腹感があつた。

6. 鈴木 巖氏(人間国宝) 宅

「茶陶なんかやるものか。」意外にも鈴木氏は、最初の頃そう思っておられたそうである。なぜなら、茶陶は生活食器など他の陶器よりも格が上だと考える傾向があり、そこに疑問を抱いたからである。しかし、氏が心血を注いで焼く志野のルーツは桃山時代の茶の湯に原点がある。志野を焼く者がどうしても避けて通れない道であった。今も茶陶の奥深さに学ぶことがたくさんあるという。

作品を展示する側へのアドバイスをお願いすると、「ガラスケースに入れて蛍光灯で見る陶器は、驚くほど本来の美しさが損なわれることがある。展示方法に工夫ができるといい。」ということであつた。警備の問題、施設設備、建物構造などを

あわせ考えると完璧な展示というのは至難のワザであるが、創意工夫を凝らして善処すべき課題と受け止めた。

最後に作品を見せていただいた。剛毅なフォルムに清澄な白い釉、重厚な存在感をたたえる茶碗であった。それは伝統を受け継いだ志野であると同時に、確かな鈴木氏の志野であった。

以上で報告は終わりです。

企画、開催に労を執られた主催者ならびに担当館のみなさん本当にお疲れ様でした。本物だけがもつ魅力にふれることができ、期待どおりの大変楽しい研修会でした。

(豊橋市美術博物館学芸員 岡田亘世)

自然科学部門

平成10年2月27日(金)、自然科学部門研修会「生物標本の新しい動向」が実施されました。(会場：名古屋市科学館 参加者17名)。

生物の分野では、標本は大切だといわれながら、展示や教育活動に使う標本についてはあまり話題になりません。そこで、今回の研究会では、自ら標本を製作し、展示や教育活動を行っている方々からお話しを伺う機会を設けました。

1. 「プラスティネーションについて」

講師：吉田穰氏（東京大学医学部標本室）

2年ほど前から全国を巡回している特別展「人体の不思議」（あるいは「人体の世界」）では、プラスティネーションというさわれる標本が話題になりました。プラスティネーションは、ドイツのフォン・ハーゲンス氏が開発した新しい合成樹脂含浸標本です。

講師の吉田氏は、このプラスティネーションを実際に作成している日本における第一人者で、人体関連だけではなく、脊椎動物や植物の標本化も試みられている方です。

吉田氏は以前から、実物を見る、できればさわって自ら確かめることの重要性を感じ、標本室の見学を希望される方々に、臓器標本（例えば動物の心臓）を実際に手で触れてもらう機会を設けています。そんな教育活動への可能性も考えながら、標本を作製、工夫されているのです。

吉田氏には、フォン・ハーゲンス氏の研究所の様子や日本への導入の状況、実際に製作している過程、器具などを紹介していただきました。

参加者からは、クラゲやコバンザメ、トンボの複眼や植物は標本にできないだろうかなど質問があり、さわれる標本への関心の高さが伺えました。

2 「教育・展示用の標本作製について」

講師：川崎医科大学現代医学教育博物館スタッフ
三宅康之氏／坂本由美氏／仁科幸子氏／
鐵原恵子氏

川崎医科大学現代医学教育博物館は、倉敷にある医学系総合学園の一施設として1981年に開館。病理標本を中心に、教育、展示用の標本作製、解説パネル、可動展示品など展示品製作を自館内で行う日本では珍しい博物館です。

展示室での活動の他、医学部やパラメディカル教育現場があるので、わかりやすい、使いやすい標本の製作、そして特殊な設備が不要で安全な製作方法を工夫改良しています。

今回は、ヘモクロモゲン反応を利用し本来の色調を再現した液浸標本・持ち運びに便利なフオリオ型液浸標本・樹脂含浸標本（プラスティネーション標本）・鋳型標本・骨染色標本・樹脂包埋標本の製作方法、そしてその利点・欠点・活用方法を紹介していただきました。

その後、2施設からご持参いただいた各種の標本を囲んで説明を受けました（写真）。



生物標本というと、多くの方が、骨格標本か、はく製、あるいはぶよぶよのホルマリン漬けというイメージを持ちます。しかし、研修に参加された方々は、そんなイメージを払拭し、活用へのヒントを持って帰られたことと思います。

最後に、お忙しい中、本研修のために準備をしていただいた講師の皆様に、改めてお礼を申し上げます。
(名古屋市科学館 尾坂知江子)

「愛知の博物館」 No.67

発行日 平成10年3月31日

編集・発行 愛知県博物館協会

〒489-0965 愛知県瀬戸市南山口町234番地

TEL (0561) 84-7474

FAX (0561) 84-4932